

賢くたくましい子どもを育てる — 火育への期待 —



大阪ガスが展開する「火育」のひとつ



園田学園女子大学人間教育学部児童教育学科准教授
廣岡 正昭 先生

子どもの生活能力の低下

私は、23年間、奈良女子大学附属小学校の教師として主に社会科学や総合的な学習の分野で実践研究に取り組み、食やエネルギー、あるいは川の学習など、ときには学校から飛び出して、子どもたちとさまざまな学習に取り組んできました。そうした経験から、近年になって切実に感じているのは、以前と比べて、今の子どもたちの生活能力が大きく低下してきているのではないかとことです。

昔の子ども達は家で手伝いをさせられましたし、遊び道具をつくらしたりもしました。火についてもそうで、以前は家庭での手伝いや親と一緒に仕事をしながら火の扱いも覚えました。ところが、今は家庭の中で、親と関わり合いながら火の扱いをはじめとする生活技術を覚えていくという経験が何事につけても少なくなっています。

確かに今の子ども達は、高学年になってキャンプに行っても、火をうまく扱えない子が目につきます。なかには、太い薪に直接マッチの火をかざす子もいます。こんなとき、家でよく働いている子はひと目で分かります。率先していきいきと動きます。

賢くたくましい子どもを育てる

賢くたくましい子に育てたいのなら、親は、具体的な生活技術を伝えることがやはり大切です。それが自信にもつながるのです。子どものやる気、何かにチャレンジしようとする気力は、大人が思っている以上に、どの子にもすぐあるものです。きっかけがあれば、子どものやる気と活動はどんどん広がっていきます。

親は、家庭内で子どもにもできる「しごと」^{*1}をうんとさせるべきです。これが賢くたくましい子どもに育てる一番の近道、本道だと思いますね。ごく簡単なことでもいい。もちろん、それは不十分なものだし稚拙だろうけれども、あえて子どもと一緒にやってみる。

^{*1} アメリカの哲学者ジョン・デューイ (1859-1952) 等が提唱した「早い時期からの子どもの手しごとが心身の発達に非常に重要だ」という考え方に基づいている。奈良女子大学附属小学校の提唱する「学習法」では、子どもの生活を発展させていくすべての営みを「学習」ととらえている。大正9年以来受け継がれるこのような伝統を踏まえた総合的な学習を、同校では子どもの「しごと」と称し、教科に該当する学習は「けいこ」、道徳などに関する学習は「なかよし」と称している。

火育への期待

毎日必ずするのが食事。だから家庭内でも、簡単な調理を手伝う、ガスコンロを使うなど食事の準備や調理は子どもの「しごと」をつくる絶好の機会です。そのとき、親の方も、子どもの目線で一緒に体験していくことが大切です。上手にできなくてもいいのです。完璧に子どもの環境を整えてあげるのではなくて、今必要なのは親が子どもの横に立って一緒に歩くこと。後ろから押すのでも、前から引っ張り回すのでもない。見守るといって手を拱いていてもしようがない。大切なのは、子どものペースに合わせて一緒に歩いていく姿勢だと思います。

その点で、大阪ガスが展開している「親子クッキング」や「火育」は、子どもがからだを使って活動的に生活技術を学ぶ機会を提供するものであり、これをきっかけに親が子どものペースと一緒に歩いていくことができるとても良い試みだと思います。そしてそれは、必ず子どもたちに生きる力を培うことにつながるものであり、高く評価できると思います。

廣岡 正昭 (ひろおか・まさあき)
園田学園女子大学人間教育学部児童教育学科准教授。
1950年生まれ。1974奈良教育大学卒業。1982年兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士課程修了。公立学校教員を経て1986年から23年間、奈良女子大学附属小学校教諭として、主に社会科学と総合的な学習の分野で実践研究を重ねる。この間、同小学校主幹教諭、奈良女子大学非常勤講師などを務め、2009年より現職。

■火育中の脳活動の計測実験 2008年

＜東北大学川島隆太教授と大阪ガスの共同研究＞

タスク

- マッチをきる
 - 火のある七輪を見る
 - 七輪で火をおこす
 - 七輪でサンマを焼く
 - 火のあるかまどを見る
 - ガスコンロの火を見る
 - ガスコンロを点火
- など14のタスクを実施



NIRSによる計測実験(子ども)の脳画像

親子10組
子ども平均年齢9.3歳



詳しくは http://www.osakagas.co.jp/html/ryori_no/index.html